り候はねば、どうをば人にゆづり申候はんとて、まはらん所をかきおとさんと思て、又よき程に一貫をおし出してかくに、又かきおほせて、二貫に成ぬ、其時思ふやう、五百をばとりはなちて、本をうしなはで、妻に返しとらせんと思ひて、ふところにおさめてけり、今一貫五百をとて、これは思ひの外の物也、おもふさまにせんと思て、又をし出したるに、かきおほせて、三貫に成てけり、其後は、或は一貫二貫よき程々におし出すに、おほやうは、かきおほせて、卅よ貫に成にけり、此上は今は手あらに振まはじと思ひて、よき程にして、去ばしやすみ候ほんとて、卅餘貫の錢取て去りぞきにけり、傍輩共、女牛に腹つかれたる心地してありけれど、今かくかひ付て、後をこそなど思ひゐたり、去程に、此ぬし其夜、やがて仁和寺の妻が本へ、此錢をもたせて行にけり、次の旦、家にて妻にいひあはせて、ゆゝしくことして、長櫃のあたらしき兩三合たづねて、誠にきら〳〵しく去たてゝ、第二日の朝とくかゝせて參たり、先起請文一紙を書て、侍の柱にをしてけり、其起請文に書樣、今日以後、ながく博打仕るべからず、過にしかたも仕らぬ事なれど、諸衆の御供して、此度始て此事仕りぬ、自今以後、もし又加樣の事仕らば、現當むなしき身と成べし、と書てをしたりけり、〔一枚起請文〕もろこし、我朝のもろ〳〵の智者達の、沙汰し申さるゝ、觀念の念にも非ず、又學問をして、念の心をさとりて申念佛にも非ず、唯往生極樂の爲には、南無阿彌陀佛と申せば、疑なく往生するぞと思取て、申す外には別の仔細候はず、但し三心四修なんど申事の候は、みな決定して、南無阿彌陀佛にて、往生するぞと思うちに、こもりて候なり、此外に奥ふかき事を存せば、二尊釋迦阿彌陀、のあはれみにはづれ、本願にもれ候べし、念佛な信せん人は、たとひ一代の法をよく〳〵學すとも、一文不知の愚鈍の身になして、尼入道の無智の輩に同じ、智者のふるまひをせずして、唯一向に念佛すべし、

爲證以兩手印